etes.

緒に、糖尿病の今を考えてみませんか?

する医療を提供するという考え を充実させるためのお手伝いを ひとりが、病気があっても人生 とともに、 わりつつあります。治療の進今、糖尿病医療の世界は、 方が生まれています。 糖尿病のある人一人 治療の進歩 変

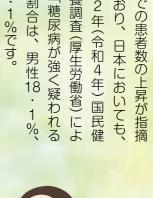
Q いでしょうか? ている方はどれくら 糖尿病とともに生き 日本において

700万人、成人の10人に1 人が糖尿病とともに生きていま 現在、全世界では、5億3. 特にアジア・太平洋、 東南

> ると、 康・栄養調査(厚生労働省)によ 2022年(令和4年)国民健 されており、日本においても、 アジアでの患者数の上昇が指摘 女性9・1%です。 人」の割合は、男性18・1%、 「糖尿病が強く疑われる

うか? **ギリアとは何でしょ** 糖尿病におけるステ

足、 り、糖尿病をもつ人は「特定の 属性に対して刻まれる負の烙印 =スティグマ」(社会的偏見に 社会における糖尿病の知識不 誤ったイメージの拡散によ





医療費増→社会保障を脅かす、 切な治療の機会損失→重症化→ スティグマを放置すると、糖尿 響を及ぼすことになります。 会全体のレベルまで、様々な影 という悪循環に陥り、 病であることを周囲に隠す→適 よる差別)にさらされています 個から社

とが考えられますして、どのようなこ スティグマの要因と

用語の見直しと糖尿病のある人 烙印 (スティグマ)を押されま の整備が進められています。 が前向きに治療に取り組む環境 おいて、スティグマを生じうる す。そのため日本糖尿病協会に にもかかわらず、 尿病のある人は自らに非がない ナスイメージの拡散により、 養指導」等)の使用によるマイ 在の疾患概念にそぐわない「療 蔑的な表現である「糖尿」や現 療で使われる不適切な用語(侮 表していない病名や、 じることが多く、 誤った認識(ことば)により生 不正確な情報・知識に起因する 糖尿病に対する社会的偏見は 社会から負の 病態を正確に 糖尿病医 糖

とがありますか。 としてどのようなこ スティグマへの対策

尿病のある人へのやさしい理解 につながります。 病に対するほんの少しの関心で 現するのは、 ボカシー活動) を展開していま る社会形成を目指す活動(アド でいきいきと過ごすことができ 促進する活動を通じて、糖尿病 協会が、糖尿病の正しい理解を わたしたちの健康に役立ち、 もあります。 をもつ人が安心して社会生活を 日本糖尿病学会と日本糖尿病 また、そのような社会を実 人生100年時代の日本 正しく知ることは、 わたしたちの糖尿

とつです。 を見直すプロジェクトもそのひ 糖尿病にまつわる。ことば

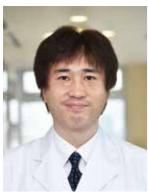
である "D-abetes" 「ダイアベティス」へ。 「糖尿病」から、世界の共通語

をしました。 ※今回の原稿は日本糖尿病協会、日本糖尿病が一)等の資料に基づいて作成が会、World Diabetes Day

黒田 英嗣 今月の先生 岐阜市民病院 糖尿病・内分泌内科

日本内科学会認定内科医·総合内科専門医·指導医 日本糖尿病学会専門医·研修指導医 日本内分泌学会内分泌代謝科専門医 · 指導医

平成10年卒 岐阜大学医学部付属病院 岐阜県立岐阜病院 海津市医師会病院



栄養部栄養管理室長 地域連携部地域連携室長

糖尿病・内分泌内科部長 栄養部長 研修センター副センター長 地域連携部副部長 研修センター後期臨床研修室長

○役職

○主な資格、認定

○卒業年、主な職歴

15 2025.1 岐阜商工 月報 14